

第2回蒲郡市東港地区まちづくりビジョン策定委員会 議事録

開催日時	令和3年3月30日（火）午後2時から午後4時10分まで
開催場所	蒲郡市生命の海科学館 メディアホール
出席者	<p>【会 長】 ・愛知大学 地域政策学部教授 戸田 敏行</p> <p>【委 員】 ・愛知工業大学 工学部 建築学科教授 安井 秀夫 ・蒲郡商工会議所 会頭 小池 高弘 ・中部地方整備局 三河港湾事務所長 山口 隼人 ・愛知県建設局 港湾課担当課長 飯田 耕三（代理出席） ・愛知県都市整備局 都市計画課課長補佐 菅沼 克文（代理出席） ・愛知県三河港務所長 白村 暁 ・愛知県蒲郡警察署 交通課係長 山本 英典（代理出席） ・蒲郡市建設部長 鈴木 伸尚 ・竹島水族館長 小林 龍二 ・蒲郡クラシックホテル統括支配人 安川 貴也 ・蒲郡市総代連合会長 細井 政雄 ・がまごおり市民まちづくりセンター代表 金子 哲三</p> <p>【事務局】 ・建設部 東港地区開発推進室副主幹 権田 吉宏</p> <p>【委託業者】 ・株式会社創建 名古屋本店 2名</p> <p>【欠席委員】 ・蒲郡青年会議所 理事長 伊藤 健二 ・愛知県東三河建設事務所長 中尾 恭啓 ・蒲郡市観光協会常務理事 長谷川 恵一</p>
議 題	<p>1 蒲郡市東港地区まちづくりビジョン素案について</p> <p>2 その他</p>
会議資料	<ul style="list-style-type: none"> ・次第 ・委員名簿 ・第1回蒲郡市東港地区まちづくりビジョン策定委員会 議事録 ・第1回東港地区まちづくりビジョン策定委員会の委員意見に対する対応及び関連記載事項 ・市民アンケート調査の結果（クロス集計） ・蒲郡市東港地区まちづくりビジョン（素案） ・対象地域（ゾーン図：A2判） ・対象地域（白図：A2判）

会議内容	<p>1 会長挨拶</p> <p>本日は、蒲郡市東港地区まちづくりビジョン（素案）についてご議論をいただきたい。午前中に開催された三河港港湾計画検討委員会では、長期構想の方向性として、東港は三河港全体の新たな価値を創造する港として位置づけが検討されている。</p> <p>今後は、三河港の具体像として、海上交通、地域の再開発等について検討予定であり、蒲郡市東港地区まちづくりビジョンと関連性が深い内容である。これらの動きも踏まえた意見をいただきたい。</p> <p>2 蒲郡市東港地区まちづくりビジョン素案について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局説明 <p>3 意見</p> <p>A委員：</p> <p>蒲郡市東港地区まちづくりビジョン（素案）は、多岐にわたる内容が記載されている。ビジョンの実現に向けて、時間軸の整理やまちの開発の初動が重要である。初動の段階では、蒲郡市のまちづくりに関わる人たちも大切である。</p> <p>住民が主役となってまちづくりを考えていくことは賛成であるが、今後、専門性のある計画について、具体的な内容を検討するためにスケッチ等を用いて示すなど、どのように進めていくのかを考える必要がある。先行して計画を示すと住民不在と言われる可能性があるが、住民の検討が先では何を検討する必要があるのかが分からなくなる。</p> <p>事務局：</p> <p>まちの活力やにぎわいをつくるにあたっては、行政は支援する立場で、民間が主体となって進めることができるとよいと考えている。まちを開発していくことについては、現実味のある絵があることが重要だと考えており、以前は行政が中心となり、民間の知恵を借りながら絵を描いてきたこともあったが、今は民間の意見を取り入れて実現性のあるものを描く必要があるため、そのように取り組んでいきたい。</p> <p>蒲郡市東港地区まちづくりビジョン策定以降、具体的な民間のアイデアを得て、それらの素材を基に、皆さんと検討したいと考えている。</p> <p>B委員：</p> <p>物事の考え方に「デザイン思考」という考え方がある。例えば、自転車のデザインでは、カッコいいサドルやハンドルを考えるのではなく、目的地に早く着くための機能を考えることである。</p> <p>蒲郡市の公共施設マネジメントの有識者会議において、これまでの手法を否定するわけではないが、物事の進め方を変える考えとしてデザイン思考を提案した。デザインの業界等では普通の考えであると思われるが、有識者会議では画期的な提案だという意見があった。</p>
------	---

蒲郡市の事例では、竹島水族館の取組みがデザイン思考であると考えている。

水族館は見て学ぶ施設であるが、見るだけでなく、見ている魚を食べることができることはすごい発想である。水族館の取組みやニーズを分析して、店舗などに活用することで活気をつくっていくことを考えていけるとよい。

蒲郡市東港地区まちづくりビジョンは非常にしっかりとできた企画書であるが、海辺のどのようなまちでも通じるものでもある。例えば、建築をつくる時には建築基準法を最低限度の基準として守る必要があるように、行政的に最低基準となるもののイメージである。蒲郡市東港地区まちづくりビジョンに基づいて、前向きな発想をデザイン思考で考えていくことでものをつくっていくことができると思う。また、デザイン会議等を設置して考えていくとよい。

事務局：

いろいろな方からの意見をお伺いする中に、「デザイン思考」という考え方も含め、より良い方法を検討していきたい。

A委員：

デザインは形だけではなく、熱いメッセージやポリシーがあり、まちの広場等をデザインするうえで必要なものである。蒲郡市の生活の豊かさをどのようにデザインするのが大切である。

蒲郡駅北の再開発により、市民はにぎわいができると考えているが、飲食店等によるにぎわいだけでよいのか。小さな町の駅前である中心市街地をどのように整備するのか市民とも話し合いをしてはどうか。

同様に、蒲郡の中心市街地、蒲郡の海辺はどのようなものを実現するのかは市民に関わりのあるものである。しかしながら、市民がデザインを考えていくことは難しい。進めていく中で実現したいまちや機能の根拠を市民に説明をする必要がある。説明ができないとイメージの違いにより、整備しても人が訪れず、評価されないことがよくある。

C委員：

海辺のみなとエリアは一番魅力的な空間であるが、一番工夫する必要があるエリアである。蒲郡市東港地区まちづくりビジョンはよくできているが、どこから取り組むとよいまちづくりができるのか、県や市、堤防等の防災の関係、水族館までの引き込み等、多様な絡みをどのように切り崩していくのか、具体的に進めていくための検討が必要である。空想で終わるのではなく、どこから始めるのかを示すことが必要である。

B委員：

ロードマップも必要であるが、どのような概念で、どのようなまちにするのか固まってきたため、ランドデザインを作り、市民に説明する必要がある。財政状況等の経済的なこともあり、決めたものをそのとおりにつくるには時間もかかり、意見も出

てくるため、しっかりとした理念をつくり、デザイン思考の中で多様な展開ができるとうい。

会長：

推進体制の記載は固いイメージもあるが、誰がどのように関わるのか等の、プログラムやロードマップが素案には必要であると思う。東港地区まちづくりに向けて蒲郡市も体制を整えている最中であるが、このままでは市民に届きにくいいため、もう少し記載を追加した方が次の展開につながると思う。

D委員：

蒲郡市東港地区まちづくりビジョンはあくまでもビジョンのため、細かい具体的な計画ではなく、資料4の2頁の記載のとおり、余白を残して市民の方と対話しながら埋めていきたいと考えている。

E委員：

今後、具体的な取組みを進めていくためには、分科会があるとよい。

蒲郡クラシックホテルには、1,000㎡程度の空き地があるため、ベンチアートプロジェクトの参加にあわせてキッチンカーやカフェ、グランピング等の事業を検討している。蒲郡駅から水族館までではなく、海辺の文学記念館まで人を引き込み、楽しんでもらいたい。

B委員：

蒲郡市のような小さなまちで、図書館や水族館、科学館等の学びの施設が海辺に集中しているのは珍しい。パワーポイント資料の13頁に記載されている要素に、「学び」を追加することで、公共施設マネジメントで検討している内容ともつながる。例えば、愛知県立三谷水産高校と連携することで、近大まぐろの養殖のように資源をつくる等、学ぶことを通じて官学連携ができるとうい。

今後、デジタル化に伴い、余暇の時間が増えると想定される。余暇の過ごし方は学ぶことにつながり、公共施設マネジメントにもつながると思う。

会長：

庁内の取組みにつながることはよいと思う。具体的に検討している事業もあるため、それらを組み込むことで全体の構成も変わると思う。

A委員：

蒲郡市の歴史を考えると東港地区においては、竹島が重要であり、もう一度シンボルとしたい。竹島は国定公園に含まれ、天然記念物に指定されているが、住民はあまり意識していない。

日常的に海を眺める中で意識できるまちづくりを進めることができるとうい。その中で、蒲郡駅から東港、水族館、海辺の文学記念館、国定公園等、市等の土地があり、これらを活かした海辺全体のランドデザインを考える必要がある。

三河港港湾検討委員会では、三河港は物流が主体のため、三

河湾国定公園に関する意見が少ない。

例えば、ワーケーションができる眺めのよい場所である。国土交通省も国定公園におけるワーケーションの推進を検討しており、そのような取組みがあると海辺で過ごすことが見直されると思う。

会長：

骨格ができたため、具体的なものを盛り込んでいくことで、ご意見のような形になってくるとよい。

F委員：

海岸の開発は必然的に細長く、奥行きがないものになるため、エリアをつなぐ必要がある。そのために仕掛けをつくり、どのように人を動かすかが重要である。今のニーズの成長や、新たなニーズをつくるため、市内外のまちを育てる人たちが関わって考えてもらいたい。まちを育てる人がどれくらいいるのかは分からないが、まずは、「まちを育てる人」を育てることを同時進行し、下地をつくる必要がある。まちを育てる人がいなければ、始めたはいいが意見が出てこない場合や、無理やり意見を出したことで失敗する場合もあると思う。

B委員：

例えば、ミカン農家を蒲郡市が募集しても市民は誰も応募しないが、外部からミカンを作りたい人が応募し、参入することもあり、この人たちを関係人口という。人口の減少傾向も関係し、まちの中だけでは限界があるため、閉鎖的なことを打破し、積極的にここで何かに取り組みたい関係人口を増やしていくとよい。

D委員：

まちを育てる人を育てることについては、他のまちでまちづくりに関わっている人などの専門家により、市民等に勉強会等を行う事業を令和3年度に実施することを考えている。市民と共に徐々に進めていきたいと考えている。

A委員：

ベンチアートプロジェクトも同様であるが、小さいプロジェクトに関わる人を増やす必要がある。これまでは一方的に参加してもらっただけであった。観光ビジョンでも観光おもてなしコンシェルジュ検定に1,400人が合格し、蒲郡おもてなしコンシェルジュ倶楽部を設置した。しかし、個人情報任意登録だったため、コンタクトを取ることができる人は300人程度と少ない。今はSNS等を利用し双方向に連絡がとれるため、関連する人を増やしながらか、蒲郡の住民、蒲郡を訪れる人と一緒に蒲郡の生活の豊かさを感じることが出来るものをつくっていきたい。また、若い人は時間がないため、まちづくり等に取り組んでいる人と同じことを求めても離れていく。時間がなくても関わられることを考えることが特に大切である。ボランティア等のあり方として、分業を取り入れるなど、若い人が関わることが出来る仕組みを考えていく必要がある。

C委員：

まちを育てる人を育てる取組みに関連することで、若者がまちづくりについて考える若者議会を設立する予定である。

G委員：

若者議会は、本日欠席している蒲郡青年会議所理事長の伊藤委員の関係者が、新しい組織を今年の4月に設立する。今後、年間20人の若者が地域の課題や魅力アップについて考えていく。5年間で100人の若者の参画を目標としている。今は24名が自主的に参加している。蒲郡について熱く語る方が多く、関心が高いと伺っている。また、若者から学ぶこともある。このようなチャンスをつくることで、皆さんが持っている思いやアイデアが集まるのではないかと思う。

蒲郡市東港地区まちづくりビジョンには、普段の日常的なものについて細かく記載されており、方向性も明記されている。一方で蒲郡市では、うどんサミット、くらふとフェア、潮干狩り、蒲郡まつり等、多様なものが民間資本、公民連携で動いており、5万人の集客がある。これには多くの人たちが参画して関わっている。まちづくりの具体的な取組みの担い手としては、これらに関わっている人たちから広げていってはどうか。

日常的な取組みと大規模催事等の両立についても記載してもらいたい。

今の子どもたちの父母世代にとって、海は、既にコンクリートで囲まれた状況であった。祖父母世代でないと海で遊んだ記憶がないと思う。生命の海科学館では、ワークショップで市民の講師を迎えて、体験や考える機会を作っているが室内の取組みである。自然を題材にした学びであるため、海辺や竹島、港でできるプログラムをつくることも必要である。

資料4の34頁にバリアフリーポンツーンマンボウが記載されている。オールジャパンのハンディキャップセーリングクラブが世界にチャレンジするための拠点として設置された。マンボウはトレーニングをするだけではなく、政府が様々な規制等の検討を行ったり、障害を持っている人が小型船舶免許を取ることができるように、小型船舶のインストラクターがバリアフリーに関する研修を受けたりする場所として活用されている。他には東京にしかない。一つの活動であるが、それをバックアップする方等を含めると関係人口は一気に広がる。東港地区を訪れて何かを買うだけでなく、海にどのようなチャンスがあるのか、どのようなチャレンジをしていくのかということを考えながら環境整備を進めてもらいたい。

分科会を新たに設ける意見は賛成である。東港地区は既に多様なプレイヤーがいるため、コミュニケーションをとることで、連携の機会を広げてはどうか。特に水族館は有名なため、連携等の動きをつくるとよい。

イメージパースは公共空間が多いが、民間施設等との連携はないか。例えば、講座等を行っているサーラ等がある。アピタ

の隣で実施した「おさんぼ」はサーラとアピタと市民団体との連携により実施した。民間との連携も考えて、歩道だけでなく、アピタや生命の海科学館、水族館等との連携を記載しても良いと思う。

会長：

ストーリー性のある提案である。蒲郡駅から竹島ふ頭に向かう広い歩道とアピタが連携することで、歩行者とアピタの多くの利用客がにぎわいをつくるため両方にメリットがある。そのように公共空間と民間施設の連携を図ることでよりよいつながりができると考えられる。

H委員：

市民がなぜ海に近づかなくなってきたのか理由を知りたい。蒲郡市東港地区まちづくりビジョンに反映するものではないと思うが、色々な声を集めて議論してはどうか。

イメージパスにより、まちのイメージがしやすくなった。3つのゾーンに分けて議論されているが、ゾーンの中だけで検討しているように思う。資料3のアンケート結果では、ゾーンに属している人がそのゾーンを活用していることがはっきりと分かる。他のエリアと混合して流動性を持たせたい。

ゾーンごとの目的とそれらを結ぶものとして、回遊動線がある。ゾーンとゾーンをシームレスにつなぐため、ニーズを持たせる意見もあったが、イメージパスでゾーンをまたいで移動するきっかけが分かりにくい。

駅前のアピタの大通りのイメージパスは、駅方面を向いているが海の方を向いたイメージパスの方がよいように思う。

ゾーンについて、公共空間も民間敷地も行政の中で県・市や所管の関係もあり、それぞれの適性もあると思われるが、同じ方向を見て進められるとよい。

会長：

東港地区は主体や資源も多い。今後はイメージパスを基に進んでいくと思う。イメージパスは分かりやすいが、意見と同様のことを感じた。動線的なイメージもイメージパスの中にもう少し表現されているとよい。

I委員：

コンセプトや考え方はまとめられている。三河港港湾計画検討委員会では、蒲郡周辺も観光の視点として三河港の拠点に位置づけ、色々な取組みが必要であることを港だけでなく、背後の住んでいる方々、訪れる方々にどのようなニーズがあり、どう応えていくのかを考えてまとめていくといった意見をいただいている。蒲郡の市民の意識が海に親しみを持たなければ海の活用はできないため、地域の方と密接な連携を取ることができるよう港づくりを考えてもらいたい。

コンセプトは資料4の記載のとおりだと思う。港湾の施設も堤防や県の土地等、十分に活用できていないところは反省点の

ため、これから市民と一緒に検討していき、できる限り協力していきたい。

今後、蒲郡市東港地区まちづくりビジョンをどのように進めていくのかが気になる。県も進める責任があり、何ができるのかを考える必要がある。具体的なものはこれからであると思われるが、どのような協力ができるのか、役割分担や協働のイメージや方向性があるとよい。

会長：

三河港港湾計画で受けられるところは受けていただくが、役割分担のほか、方向性をもう少し記載できるとよい。

J委員：

資料4の36頁に「港エリアの実現に向けて解決の必要がある事項」が整理されている。他のエリアについても解決の必要がある事項があれば整理されているとよい。

K委員：

繰り返しの意見になるが、三河港港湾計画検討会では、長期構想として、20年、30年後の将来像を議論している。三河港港湾計画素案では、東港地区をターゲットとして、人々を海へ誘う魅力ある港づくりに位置づけている。具体的には、観光資源間の回遊性の向上、拡大を図り、来訪者と地元住民の交流機会の増大に伴う、地域経済の活性化等を位置づけている。

港湾管理者である県の役割の1つとして、資料4の36頁の「海辺のみなとエリア」の実現に向けて解決が必要な事項に記載されているとおり、東港地区の港湾計画上の土地利用について蒲郡市東港地区まちづくりビジョンで考えられているような、市民、来訪者が憩い、交流できる土地利用となるよう、三河港港湾計画の改定の中でも変更していききたい。そのためには、蒲郡市民の方々がこのエリアをどのようにしていききたいのかを三河港港湾計画の改定の中で位置づけていききたい。

A委員：

愛知県の港の中で観光を担う港は多くないため、蒲郡市民に三河港港湾計画において、県全体から期待されている港であることを知らせた方がよいと思う。

これまではポートルネッサンス構想等を国、県が策定していたため、簡単には変更できなかったが、計画が変更できるようになったのか。

B委員：

港湾側から止められていたから港湾の整備ができないというイメージだという話を聞いていた。港湾側での考え方が異なることを初めて知った。

会長：

これまでは物流に着目していたが、視点が変わってきているため、土地利用を変える話になっている。

I委員：

今までの状況は会長の説明のとおりである。以前は、埠頭用

地として国からの補助金等を活用して旅客船やフェリー等を想定した施設を整備し、地域と一緒にポートルネッサンス21等により位置づけていたが、いざ活用しようとした段階で需要がなく、活用できていない状態となっていた。今が計画のあり方を見直すタイミングである。ポートルネッサンス21等の構想が完全に白紙になるわけではないが、新しいまちづくりを進めることができるよう再検討している段階である。

会長：

分科会の話もあったが、港湾計画の改定の説明の機会がエリアごとにあってもよいと思う。

東港地区まちづくりビジョンについて、ハード的な整備に関する記載はよいと思われるが、ソフト的な官民連携等の仕組みはつくっていく必要がある。イメージパースが東港地区まちづくりビジョンに描かれるため、今後、市の体制が整うことでまちづくりを推進することができるようになる等の記載があると分かりやすくなる。

L委員：

イメージパースによりイメージができるのがよい。話が進んでいくと、全国の港のまちで活用しているものを参考にするとよいと思う。

会長：

多様なご意見をいただいた。ご意見踏まえて、案の作成を進めてもらう。

4 報告事項

事務局：

東港地区に代わるネーミングについて検討した結果、現在、市民に東港地区のまちづくりが浸透していないため、市民がどのようなまちにしていきたいのかを考えてから決めた方がよいとの結論に至り、現在作成中の蒲郡市東港地区まちづくりビジョンでは、現行の名称から変更はしないものとする。

A委員：

竹島ベイパークという名称は公式ではないのか。

事務局：

竹島ベイパークはグランドゴルフ場と多目的広場のある場所のことを指し、暫定利用している場所の名称である。東港地区全体の名称としては使われておらず、対象の範囲が異なる。

今後のスケジュールは、本日のご意見を基に案を作成し、令和3年7月にパブリックコメントの募集を実施し、令和3年8月に第三回の委員会を開催して、東港地区まちづくりビジョンを公表する予定である。

5 蒲郡市建設部長（鈴木）あいさつ

本日は、年度末の大変お忙しいところお集まりいただき、活発なご意見をいただきましてありがとうございますございました。

前回の策定員会で、健康増進に繋がるようなまちづくりができるとよいというご意見や海を見ると癒されて元気が出るという話もあった。今後、この地区でどのようなまちでありたいかを考えると、体が健康になるだけでなく、心も健康になるような場所にできたらよいのではと思う。

まちづくりを進めていくにあたり、ビジョンに示すイメージのような開発にすぐに着手するのではなく、まずは試しながら市民がこの場所に来ていただけるように、一歩ずつ進めていきたいため、皆様のご協力をお願いしたい。